

『薄紅天女』

荻原規子 著 徳間書店 2,200 円 (本体)

「至って平凡」な主人公が共感を呼び
日本の歴史・文化に根ざしたファンタジー

会員 藤井 裕子 (62 期)



私のお薦めの一冊は、「薄紅天女」である。

「薄紅天女」は、ファンタジー作家の荻原規子氏が手がけた勾玉三部作の「空色勾玉」「白鳥異伝」に続く、三作目であり、私の中では、同氏の作品の中の一番のお気に入りである。

荻原規子氏の作品は、勾玉三部作以外も、「風神秘抄」などの派生本や、「西の善き魔女」シリーズや、「RDG レッドデータガール」シリーズ、最近では、「エチュード春一番」シリーズなどがあり、私は、中学のときから、現在に至るまで、読み続けている。

「薄紅天女」では、日本人と蝦夷との混血の「阿高」、帝の娘で内親王の「苑上」の2人が主人公である。「阿高」を中心に描かれる関東・東北編と「苑上」が中心に描かれた後に上京してくる「阿高」と一緒になって描かれる近畿編の二つからなっており、ストーリーの構成が絶妙で素晴らしい。

「空色勾玉」から物語の中心にある勾玉は、日本の神に由来し、天皇家とも深いつながりを持つという設定で、「空色勾玉」でも「白鳥異伝」でも人々・時代を超えて子孫までをつなぐ役割を担う。

「空色勾玉」「白鳥異伝」からの続きでもある「薄紅天女」では、方々に散り、最後に残った勾玉を、竹芝の「阿高」の父が、「阿高」の母である異能の蝦夷の女神に贈り、坂東の男の子として生まれた「阿高」が受け継ぐ。「阿高」は、居場所を求め、蝦夷の元に行き「勾玉」の力を使うことも知るが、「阿高」は、友の助けで居場所を再確認し、「勾玉」の力が求められる都に上る過程で、同じく居場所を

求めて鬱屈した「苑上」と出会い、呪われた長岡京で、「勾玉」を使うことになるのである。

坂上田村麻呂や、後の空海、藤原薬子、後の平城天皇や、後の嵯峨天皇、アテルイなど、歴史上の人物が描かれたり、蝦夷討伐、藤原京から平安京への遷都も描かれるなど、歴史上の物事ともちらほら接点があるところが、読者に、現実とファンタジーを行き来させる。

荻原規子氏の作品の魅力というのは、主人公の性格が「至って平凡」であり、どこにでもいる女の子、男の子という設定であることである。実際には、特殊な能力があったり、身分があったりするなど、「非凡」なのであるが、あくまで、主人公自らは「平凡」な生活や身の丈に合った幸せを求めるところが、読者の共感や感情移入を呼ぶのである。

ファンタジーというのは、もちろん通常ではありえないことが多いが、突飛すぎではダメで、少しでも身近なものがないければ、ファンタジーたり得ないのである。

日本には、八百万の神、自然信仰や、地域に根ざしたおとぎ話などがあり、荻原規子氏の作品は、日本における独自のファンタジーの可能性を感じさせる。

また、荻原規子氏の作品では、人物描写だけでなく、風景の描写も適時に出てきて、頭の中で風景が思い描きやすい。

仕事の合間に、また、お子さんたちと読む作品としても、お薦めである。